青年期の抑うつ，対人恐怖と自己愛心性に関する研究

―質問紙法および投影法によるパーソナリティ特性の一考察―

14007PCM　南条　歩

Ⅰ．問題

青年期は自己愛の高まる時期とされ，第 2 の分離―個体化過程である（Blos，1962）。正常な自己愛は，自尊心を保ち，自分の関心や望みや夢を追求していくために必要なものである。こういった青年期特有の自己愛の高まりは，青年の自立や発達の促進に重要な役割を持っている一方で，自己愛の高まりによって，周囲の反応に敏感で傷つきやすく様々な症状や不適応を起こしている青年も少なくない。自己愛の傷つきが人間の心的なトラウマのかなりの部分を占めている。このことを「自己愛トラウマ」（岡野，2014，p.15）と呼び，自己愛やその傷つきによるトラウマを知ることは人の心を理解する上で非常に重要となるとした。対人恐怖は「恥」を恐れる病理であるとしばしば論じられているが，「恥」とは自己愛的な欲求の破綻から生まれる感覚であると考えられる。対人恐怖とは過度に自己愛的傷つきを恐れる病理であろう。

日本の自己愛性人格障害の事例は誇大性よりも，自己評価の低さ，抑うつ感，引きこもりといった形をとりやすく，過敏型自己愛傾向の事例を多く散見する。コフートの理論に基づき，過敏型自己愛傾向の諸側面を考慮した概念に，自己愛的脆弱性がある。対人関係の築きにくさや対人関係における不安や葛藤は，抑うつと自己愛に関連があり，社会性の発達と自己愛的パーソナリティの問題は密接な関係がある。

Ⅱ．研究 1

1．目的

自己愛的脆弱性を対人恐怖傾向の規定要因と仮定し，対人恐怖傾向との関連，そして抑うつとの関連を検討する。

2．方法

調査対象者：A 県内の B 大学，大学生 150 名を対象に質問調査を実施した。有効回答 129 名（男性 33 名，女性 96 名，平均年齢 20.1 歳）を分析対象とした。

調査手続き：201X 年 9 月に，授業時間内の一部で質問紙を配布し，集団で実施した。

質問紙の構成：フェイスシート，自己愛的脆弱性尺度短縮版（上地・宮下，2009），日本語版 Liebowitz Social Anxiety Scale（朝倉・小山，2002），自己評価式抑うつ性尺度（Zung, 1965）から構成された。

3．結果と考察

各下位尺度間の関連を見るため，強制投入法による重回帰分析を行った（図 1）。その結果から，LSAS 恐怖／不安感と LSAS 回避の背景には，共通して「自己顕示抑制」という自己愛的脆弱性の側面が潜んでいることが示された。これは，対人場面における行動への潜在的な恥意識を抱えているがゆえの恐怖や不安感が高まると言え，また，恥意識が高まり自己のあり方に不安定さが起こることで，自己への傷つきの恐れから回避が高まるのだろう。「自己緩和不全」および「承認・賞賛過敏性」の影響は，周りを取り巻く他者と自己の異質感，自分自身に対する空虚感といった対人関係での安心感がない（山田，2010）ということと，他者からの評価を求めることによって自己評価を維持する（鍋田，1997）という，他者から評価されることに対して恐怖や不安感を抱き，LSAS 恐怖／不安感が高まるのだろう。そして，抑うつの背景には「自己顕示抑制」と「承認・賞賛過敏性」という自己愛的脆弱性の側面が潜んでおり，強い恥意識があるために自己顕示を抑制しがちになる反面，自分らしさがない喪失感や，自分の発言や行動に対して他者が示した反応の失敗体験から引き起こされた否定的感情により抑うつが高まるのだろう。そして，対人恐怖傾向の高い

人々は他者を恐れ，他者との関わりを回避する行動傾向を持つ者は，抑うつ傾向も高い（Brady&Kendall，1992）など精神的な苦痛を経験する可能性が高いことから，LSAS 回避が高まるという可能性が示唆された。

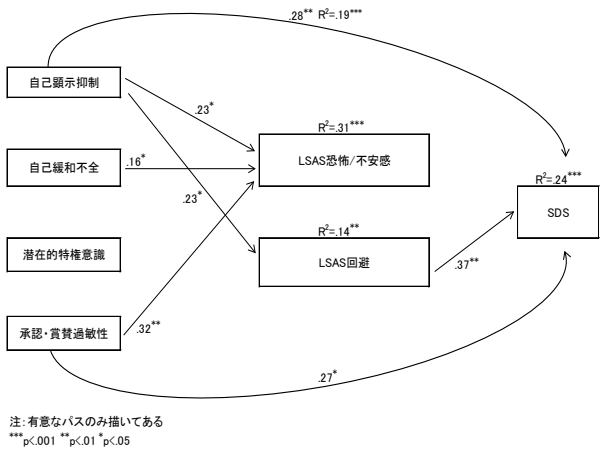

図 1.自己愛脆弱性と LSAS-J，SDS の関連

Ⅲ．研究 2

1．目的

自己愛的脆弱性と対人恐怖心性の両方がある従来型の特徴を示している群と，従来型とは異なり自己愛的脆弱性がありながらも対人恐怖心性がないという矛盾型の特徴を示している群，という 2 つの群からそれぞれに該当している者に対して心理査定法面接を実施する。質問紙法による自覚的な評価と，投影法による他覚的な評価とのテストバッテリーの照合により，総合的なパーソナリティ特性について検討する。

2．方法

調査対象者：研究 1 の結果から，自己愛的脆弱性が 60 点以上，LSAS－J が 70 点以上と 30 点以下，および SDS が 49 点以上に該当する群から，1 名ずつ抽出し心理査定法面接を行った。

投影法のテストバッテリー：文章完成法，HTP 描画法，動的家族画法，樹木画法（枠なし），TAT，ロールシャッハ法であった。

3．結果と考察

協力者 A は，自己愛的脆弱性と対人恐怖心性が高く，中程度の抑うつ感を自覚していると評価され，さらに他覚的な評価でも同様なパーソナリティ特性が認められた。より現実的，具体的な認知や対応をする自己中心的な児童期心性や，幼児期的な万能感と思考の全能などの強迫的な完全主義傾向があると思われ，自己愛的な自己対象関係を希求するものと考えられる。

協力者 B は，自己愛的脆弱性が高く，中程度の抑うつ感を自覚しているが，対人恐怖心性はほとんどないと自己評価したが，投影法による他覚的な評価では，高い対人恐怖心性すなわち被害的な対人関係念慮が示された。B 自身の葛藤を否認して「偽りの自己」による内的に引きこもる様子があり，欲動や衝動は原始的な自我防衛機制である分裂や投影同一化などにより他者に投げ入れられ，被害的不安や恐怖を体験していると推察された。

Ⅳ．総合考察

自覚的評価では A，B ともに自己愛的脆弱性であった。A には対人恐怖心性も顕在していたが，B には対人恐怖心性が顕在していなかった。そして，A，B の内的には誇大的で万能的な自己愛が存在していた。しかし，その内的な自己愛の水準は A と B との間では異なっていた。両者ともに脆弱的な自己愛を自覚していたが，他覚的な視点からはAは万能的な自己愛パーソナリティではあるが，そこには柔軟性や創造的に退行できる健康な自我能力を持っていた。一方 B は，引きこもりが強く万能的かつ誇大的な自己愛であった。よって，A にはコフートの過敏型自己愛，B には引きこもりが強い内向的なスキゾイド型の自己愛人格の側面があると考えられる。B の被害的な対人恐怖心性や内的な自己像については，他覚的な視点における心理査定法を通して明らかに示されたことである。乳幼児期過程における母親からの共感と映し出しによる体験の乏しさは， A と B に共通していると考えられる。

今後の課題

心理臨床的なデータを得ることが必要であり，十分な臨床的情報やデータを踏まえた上で心理検査法による心理査定と解釈をしていくべきであろう。